

国立国語研究所学術情報リポジトリ

現代の漢字使用の実態と意識に関する計量言語学的研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-12-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所言語計量研究部, 斎賀, 秀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002394

099
139
S53
1000104727

課 題 番 号	1 4 1 0 1 0
研究代表者	斎 賀 秀 夫

昭和53年度科学研究費補助金（一般研究 A）
研究成果報告書

現代の漢字使用の実態と意識に関する
計量言語学的研究

国立国語研究所 言語計量研究部

1979年 2 月

昭和 5 3 年度科学研究費補助金（一般研究 A ）
研究成果報告書

1. 課題番号141010
2. 研究課題現代の漢字使用の実態と意識に関する計量言語学的研究
3. 研究代表者（所属機関・部局・職・氏名）
国立国語研究所・言語計量研究部・部長・斎賀秀夫
4. 研究分担者（所属機関・部局・職・氏名）
国立国語研究所・言語計量研究部第2研究室・室長・野村雅昭
国立国語研究所・言語計量研究部第2研究室・室員・佐竹秀雄
5. 研究経費

昭和51年度	4,900千円
昭和52年度	2,000千円
昭和53年度	400千円
計	7,300千円

6. 研究成果
- 2ページ（次葉）以降に記す。

7. 研究発表
- (1) 学会誌等
- 佐竹秀雄、表記のゆれを測る尺度について、計量国語学、80号、52年3月
- 佐竹秀雄、表記のゆれを測る、国立国語研究所報告、59、52年3月
- 田中章夫、漢字調査における統計的尺度の問題、国立国語研究所報告、59、52年3月
- 野村雅昭、表記のユレの数量化、計量国語学、81号、52年6月
- 田中卓史、表記変容のシミュレーションシステム、計量国語学、85号、53年5月
- 田中卓史、漢字仮名まじり文の変容、bit、10巻15号、53年12月
- (2) 口頭発表
- 斎賀秀夫、現代漢字の機能、文化庁国語問題協議会、51年10月

1. 研究の概要

【研究の経過】

この報告は、昭和53年度文部省科学研究費補助金（一般研究A）による「現代の漢字使用の実態と意識に関する計量言語学的研究」の研究結果の一部をまとめたものである。

この研究は、昭和51年度より3箇年の継続研究として行われ、昭和52年度までに実質的な作業の大部分を終了し、本53年度は、残った部分の集計と全体の整理にあてられた。ただし、昭和51年度の研究内容については、『現代の漢字使用の実態と意識に関する計量言語学的研究（中間報告）』（1977. 2）を刊行し、そこに報告したので、ここで詳しくは触れない。ここで報告するのは、主として昭和52年度の研究結果に関するものである。

【研究の内容】

この研究は、下記のⅠ～Ⅲの三部門からなる。それぞれの目的・内容は、つぎのとおりである。

Ⅰ 語彙調査データによる漢字基本度の研究

国立国語研究所の、雑誌・新聞等の語彙調査データによって、漢字使用の実態を分析し、各漢字のウェイトの相違を的確に測定しうる統計的尺度を確定するとともに、それに基づいて、漢字基本度の段階づけを試みる。

Ⅱ 漢字使用の意識についての研究

社会人・学生を対象として、漢字使用についての意識を多角的に調査し、漢字の使い分け、漢字とかなの書き分けなどの意識を分析することによって、表記の個人差の生ずる要因を明らかにする。

Ⅲ 漢字かなまじり文の生成に関する実験的研究

これまでの調査結果に基づき、漢字および文字連続に関する種々の情報を電子計算機内のファイルに蓄積し、シミュレーション等の方法によって、現代語表記の成立条件を明らかにする実験を行う。

51年度は、上記のⅠについて、漢字使用の重みを測定する尺度として、「カバー率」という概念を設定し、それに基づき、現代雑誌九十種の漢字調査（国立国語研究所報告22）のデータについて、各種の計算を施し、漢字の重みづけを行った。Ⅱについては、東京・京都・神戸・北九州で、社会人・学生617人を対象に、主として選択肢法による、漢字の使い分け意識の調査を実施した。Ⅲについては、高校社会科教科書3種の漢字かなまじり文（約30万字）をデータとして、文字の連続確率を算出した。これらについては、上記の中間報告に、その結果を示した。

52年度は、Ⅱについて、東京・仙台・静岡・岐阜で、社会人・学生441人を対象に、主として記入法による、表記意識の調査をおこなった。これについては、電子計算機で基本集計を行い、分析を施した。その結果、つぎのことが明らかになった。

①表記のゆれは、個人差が大きいだけでなく、個人の内部においても、文脈や場面による差が存在する。

②複数の漢字表記が可能な語では、その表記の際に迷いが生じやすい。

③表記の正誤・可否を決定する基準は、個人によって、また、語によって、多様である。

また、52年度は、Ⅲについて、表記変容のシミュレーションの実験を行った。これは、現代語の文章表記の変容にかかわると考えられる諸条件（語種・品詞・頻度等）を、電子計算機内の辞書によってコントロールし、それに応じた各種の漢字かなまじり文を出力させるものである。これによって、漢字かなまじり文の表記のレベルを設定することが可能になり、同時に、教科書、雑誌などの文章の種類と表記のレベルの関係が明らかになった。

この報告には、52年度に行った研究について、53年度に整理を終えたもののうち、表記意識の調査の集計の一部と、表記変容のシミュレーションの実験例を収める。

【研究担当者】

この研究に参加したのは、国立国語研究所言語計量研究部の全員であり、部長の斎賀秀夫が全体を統括した。研究の分担は、下記のとおりである。

- I 漢字基本度の研究…田中章夫（５１年度まで）
- II 漢字使用の意識の研究…野村雅昭（５２年度から）・佐竹秀雄・土屋信一・中野洋・靄岡昭夫
- III 漢字かなまじり文の生成の研究…斎藤秀紀・田中卓史（５２年度から）・米田正人（５１年度まで）

この報告の作成には、野村雅昭・佐竹秀雄・田中卓史があたった。

以上のほか、京都府立大学の寿岳章子・樺島忠夫の両教授、東北大学の加藤正信助教授の協力を得た。また、調査の実施には、宮城県教育庁社会教育課の郷古康郎課長・伊勢行雄主事をはじめ、関係各方面のお世話になった。

2. 表記意識に関する調査の集計

【調査の目的】

漢字とかなの使い分け、および、同じ語についての異なる漢字表記形の使い分けに関する意識と実態を調査し、表記における個人差が生じる要因をさぐる。

【調査の時期】

1977年12月～1978年2月

【調査の対象】

- 静岡県広報協会所属の広報担当者 54名
- 東北大学文学部・学生 78名
- 都立赤羽高等職業訓練校・訓練生 49名
- 宮城県教員研修会参加の教員 58名
- 仙台市立立町小学校PTAの主婦 55名
- 宮城県村田町成人教育講座参加の一般成人 38名
- 岐阜市立且格小学校研究発表会参加の教員 87名
- 大蔵省印刷局研修会参加の公務員 22名

合計 441名（有効調査票438枚、記入もれなどによる無効調査票3枚）

調査対象の年齢と職種の間係を示すと次のようになる。

		広報担当者	教員	学 生	主 婦	一般公務員	そ の 他	合 計
25才以下	人 %	9 (6.4)	10 (7.1)	78 (55.8)	－ (－)	24 (17.1)	19 (13.6)	140
26～30	人 %	24 (38.7)	19 (30.6)	1 (1.6)	1 (1.6)	3 (4.8)	14 (22.6)	62
31～40	人 %	12 (11.5)	42 (40.4)	－ (－)	30 (28.8)	7 (6.7)	13 (12.5)	104
41～50	人 %	5 (4.9)	62 (60.8)	－ (－)	17 (16.7)	8 (7.8)	10 (9.8)	102
51才以上	人 %	4 (13.8)	13 (44.8)	－ (－)	2 (6.9)	2 (6.9)	8 (27.6)	29
不 明	人 %	－ (－)	－ (－)	－ (－)	－ (－)	－ (－)	1 (100.0)	1
合 計	人	54	146	79	50	44	65	438

【調査の方法】

集合調査法による。

【調 査 票】

22ページの後に付す。

【集計のねらい】

集計は、各項目の単純集計のほかに、次の観点からの集計も行った。

- A. かなで書くか、漢字で書くかの使い分けについて
 - a. 年齢、職種によってどのような差があるか。
 - b. 単語の性質によってどのような差があるか。
 - c. 迷いを生じるのは、どのような単語か。
- B. 二種以上の漢字表記形がある場合の使い分けについて
 - d. 表記する際に迷いを生じるのは、どのような単語か。
 - e. 使い分けと年齢との間に、関連性は認められるか。
 - f. 使い分けと職種との間に、関連性は認められるか。
- C. 表記に関する正誤意識について
 - g. どのような表記に対して、正誤意識による反応が現れるか。また、正誤、適不適の理由は、どのようなものか。

【集計表について】

上記の【集計のねらい】の a～g の各項目に応じて整理したものが、以下の集計表の表 1～表 7 である。つまり、

表 1 a に関するデータ

表 2 b に関するデータ

⋮ ⋮

表 7 g に関するデータ

というように対応させてある。

また、表 8 は、年齢、性別、職種、学歴および、問題 A、C に関する単純集計である。

【グラフについて】

図 1、図 2 は、表 1 におけるかな書きの比率を、それぞれ年齢別、職種別に図示したものである。

図 3、図 4 は、同様に、表 2 におけるかな書きの比率を、語種別、品詞別に図示したものである。

図 5 は、問題 B、D に含まれる単語一つずつのかな書き比率が、年齢によってどのように変わるかを図示したものである。大きく三つに分類される。すなわち、年齢があがるにつれて、かな書き比率が、

- A. 減少する。
- B. 増加する。
- C. 減少・増加のどちらとも言えない。

の三種である。

図 5 の A、B、C は、それぞれの代表的なものをあげてある。

〔表 1〕

かなで書いたか、漢字で書いたか、の比率について、問題B、Dの全調査対象語（97語）における平均値を求め、それを年齢別、職種別に示した。

		人 数	かな書き	漢字書き	まぜ書き	無 答
全 体		438	35.8%	61.2%	2.2%	0.8%
年 齢 別	25才以下	140	35.5	62.0	2.1	0.4
	26～30才	62	39.6	57.6	2.6	0.5
	31～40才	104	35.9	60.7	2.5	0.9
	41～50才	102	34.6	62.6	2.0	0.8
	51才以上	29	33.4	61.9	2.2	2.5
職 種 別	広報担当者	54	39.2	57.7	2.4	0.7
	教 員	146	37.5	59.3	2.5	0.7
	学 生	79	35.4	62.3	2.1	0.2
	主婦	50	31.4	66.1	1.8	0.7
	一般公務員	44	31.2	66.3	2.0	0.5
	その他の	65	35.9	60.0	2.1	2.0

〔表 2〕

かなで書いたか、漢字で書いたか、の比率について、問題B、Dの全調査対象語（97語）における平均値を求め、それを語種別、品詞別に示した。

		語 数	かな書き	漢字書き	まぜ書き	無 答
語 種 別	漢 語	28	6.9%	90.4%	2.2%	0.5%
	和 語	66	48.1	48.4	1.7	0.9
品 詞 別	体 言	43	11.8	83.7	3.9	0.6
	地名	3	0.6	99.2	—	0.2
	一般名詞	37	11.1	83.8	4.5	0.6
	代名詞	3	32.4	67.1	—	0.5
	動 詞	15	38.1	58.3	3.0	0.6
	形容詞	7	45.6	53.7	—	0.7
	補助動詞	6	55.1	44.0	—	0.9
	副 詞	6	56.7	41.8	0.5	1.0
	接 辞	16	67.0	31.5	—	1.5
	その他の	3	97.1	2.4	—	0.5

〔表 3〕

問題Dの全調査対象語（４０語）の表記において、かなで書くか、漢字で書くかを、どれぐらいの人が迷ったかを示した。全体で１０％以上の人が迷ったものを多い順に掲げた。なお、参考のために年齢別ごとの比率をも掲げた。

	全 体		年 齢 別 の 比 率 (%)				
	人 数	比 率	25 以下	26～30	31～40	41～50	51 以上
カ ゼ	129人	29.5%	32.1%	37.1%	26.0%	28.4%	17.2%
ス テ キ	99	22.6	29.3	19.4	18.3	22.5	13.8
オ モ シ ロ イ	88	20.1	20.0	19.4	15.4	26.5	17.2
ミ ソ シ ル	83	18.9	26.4	17.7	15.4	15.7	10.3
ア カ リ	75	17.1	18.6	16.1	12.5	21.6	10.3
ナ オ ル	72	16.4	17.1	14.5	11.5	21.6	13.8
フ シ イ キ	72	16.4	12.1	17.7	17.3	20.6	17.2
ス バ ラ シ イ	65	14.8	18.6	6.5	14.4	15.7	13.8
ゴ ハ シ ョ ン	64	14.6	21.4	17.7	10.6	7.8	13.8
モ ド ル	52	11.9	12.1	17.7	6.7	11.8	17.2
ア タ タ カ イ	50	11.4	12.1	17.7	9.6	8.8	10.3
ジュ ウ ブ シ ョ ン	47	10.7	6.4	14.5	14.4	9.8	13.8
タ イ ヘ シ ョ ン	47	10.7	14.3	14.5	6.7	7.8	10.3
サ ビ シ イ	45	10.3	7.1	14.5	6.7	16.7	6.9
ア ナ タ	45	10.3	7.9	11.3	10.6	13.7	6.9

〔表 4〕

問題Dの全調査対象語（４０語）の表記において、二つ以上の漢字表記形が思い浮かんで迷った人の比率を示した。全体で５％以上の人が迷ったものを多い順に掲げた。なお、参考のために年齢別ごとの比率をも掲げた。

	全 体		年 齢 別 の 比 率 (%)				
	人 数	比 率	25 以下	26～30	31～40	41～50	51 以上
ジュ ウ ブ シ ョ ン	134人	30.6%	32.9%	35.5%	31.7%	27.5%	13.8%
（銀座の）マチ	110	25.1	29.3	32.3	23.1	18.6	20.7
（海辺の）マチ	91	20.8	25.7	27.4	16.3	15.7	17.2
ア カ リ	85	19.4	21.4	27.4	17.3	14.7	17.2
サ ビ シ イ	63	14.4	22.9	11.3	7.7	12.7	10.3
ア ウ	45	10.3	12.1	6.5	9.6	10.8	10.3
ア タ タ カ イ	42	9.6	12.9	14.5	7.7	3.9	10.3
ナ オ ル	39	8.9	12.9	12.9	7.7	2.9	6.9
カ ラ ダ	31	7.1	5.7	8.1	9.6	7.8	—

〔表 5〕

問題B、Dに含まれている、次の二組の表現

- { アタタカナ (オココロヅカイ)
アタタカイ (ゴハン)

- { (ウミベノ) マチ
(ギンザノ) マチ

の「アタタカイ」「マチ」のそれぞれにどのような表記形をあてているかによって分類し、それと年齢別の比率を示した。

オココロヅカイ	ゴ ハ ン	全 体	25 以下	26 ～ 30	31 ～ 40	41 ～ 50	51 以上
温	温	49人 11.2%	10.0%	9.7%	10.6%	11.8%	17.2%
温	暖	20 4.6	2.9	8.1	5.8	3.9	3.4
暖	温	23 5.3	4.3	9.7	4.8	3.9	6.9
暖	暖	146 33.3	40.0	19.4	25.0	44.1	24.1
あ た た か	あ た た か	73 16.7	15.0	24.2	22.1	10.8	10.3
あ た た か	温	31 7.1	6.4	12.9	8.7	3.9	3.4
あ た た か	暖	48 11.0	9.3	6.5	12.5	13.7	13.8
暖	あ た た か	27 6.2	7.9	3.2	7.7	3.9	6.9
そ の 他		21 4.6	4.2	6.3	2.8	4.0	14.0

ウ ミ ベ	ギ ン ザ	全 体	25 以下	26 ～ 30	31 ～ 40	41 ～ 50	51 以上
町	町	177人 40.4%	29.3%	51.7%	47.1%	41.2%	44.8%
町	街	211 48.2	62.9	33.9	39.4	48.0	37.9
街	街	6 1.4	1.4	—	1.9	2.0	—
街	町	25 5.7	5.7	11.3	5.8	2.0	6.9
そ の 他		19 4.3	0.7	3.1	5.8	6.8	10.4

〔表 6〕

問題B、Dに含まれている、次の二組の表現

- { アタタカナ (オココロヅカイ)
アタタカイ (ゴハン)

- { (ウミベノ) マチ
(ギンザノ) マチ

の「アタタカ」「マチ」のそれぞれにどのような表記形をあてているかによって分類し、それと職種別の比率を示した。

オココロヅカイ	ゴ ハ ン	全 体	広報担当者	教 員	学 生	主 婦	一般公務員	そ の 他
温	温	49人 11.2%	14.8%	11.6%	6.3%	6.0%	20.5%	10.8%
温	暖	20 4.6	5.6	4.1	2.5	8.0	2.3	6.2
暖	温	23 5.3	7.4	5.5	5.1	2.0	9.1	3.1
暖	暖	146 33.3	24.1	30.8	49.4	34.0	20.5	35.4
あ た た か	あ た た か	73 16.7	16.7	19.2	13.9	20.0	15.9	12.3
あ た た か	温	31 7.1	3.7	5.5	3.8	4.0	13.6	15.4
あ た た か	暖	48 11.0	14.8	9.6	10.1	20.0	9.1	6.2
暖	あ た た か	27 6.2	9.3	6.8	6.3	4.0	2.3	6.2
そ の 他		21 4.6	3.6	6.9	2.6	2.0	6.7	4.4

ウ ミ ベ	ギ ン ザ	全 体	広報担当者	教 員	学 生	主 婦	一般公務員	そ の 他
町	町	177人 40.4%	29.6%	50.7%	20.3%	50.0%	27.3%	52.3%
町	街	211 48.2	44.4	42.5	70.9	38.0	65.9	32.3
街	町	6 1.4	1.9	0.7	2.5	2.0	—	1.5
街	街	25 5.7	11.1	2.1	6.3	4.0	6.8	9.2
そ の 他		19 4.3	13.0	4.0	—	6.0	—	4.7

〔表 7〕

問題Eにおいて、訂正の反応が示されたものを示した。表は反応者の人数が20%以上のものを多い順に掲げた。
 なお、この表に続く次の項目の反応者数は42名(9.6%)である。

原表記	反応者数	主な訂正表記	理由の反応者数		理由の反応項目（◎20％以上、○5％以上）															
	()内は％	()内は人数	誤り	不 適 当	1	2	3	4	5	6	7	A	B	C	D	E	F	G	H	
表れ	352 (80.4)	現れ(265) あらわれ(43)	250	62	◎							○								
曜日	348 (79.5)	曜日(345)	143	165	○	○				○			○		○	○	○	○		
雲でい	291 (66.4)	雲泥(221) うんでい(45)	54	207				○				○		○	○		○			
午後	285 (65.1)	午後(284)	100	143	○	○				○			○		○	○				
訪問	259 (59.1)	訪問(258)	236	3	◎															
先ず	233 (53.2)	まず(230)	75	138			○							○	○					
オ一	226 (51.6)	第一(203) だいいち(23)	93	118		○				○			○							
云う	211 (48.2)	言う(178) いう(33)	82	104	○	○				○										
超える	210 (47.9)	越える(184)	128	48	◎															
あそび	209 (47.7)	遊び(205)	12	171								○		○	○		○			
迄	171 (39.0)	まで(169)	68	87			○							○	○					
応待	126 (28.8)	対応(124)	95	11	◎															
位	120 (27.4)	くらい(120)	37	75			○							○						
下りる	114 (26.0)	降りる(70) おりる(40)	53	46	○															
跳ぶ	107 (24.4)	飛ぶ(80)	37	55	○							○								
眼	100 (22.8)	目(98)	26	65	○							○								

〔表 8〕

年齢、性別、職種、学歴、および、問題A、Cについての単純集計の結果を示す。

		20 以下	21～25	26～30	31～40	41～50	51 以上	不 明
年 齢	(人)	31	109	62	104	102	29	1
	(%)	7.1	24.9	14.2	23.7	23.3	6.6	0.2
		男	女					
性 別	(人)	232	206					
	(%)	53.0	47.0					
		広報担当者	教 員	学 生	主 婦	一般公務員	そ の 他	
職 種	(人)	54	146	79	50	44	65	
	(%)	12.3	33.3	18.0	11.4	10.0	14.8	
		小学校卒	中学校卒	高 校 卒	大 学 卒	そ の 他		
学 歴	(人)	3	13	145	269	8		
	(%)	0.7	3.0	33.1	61.4	1.8		
問 題 A								
1. 手紙・はがきの 枚数	(人)	0	1 ～ 3	45	6～	無 答		
	(%)	186	194	30	26	2		
	(%)	42.5	44.3	6.8	5.9	0.5		
2. 筆 記 具 (封 書)	(人)	毛 筆	万 年 筆	サインペン	ボールペン	鉛 筆	二種以上	そ の 他
	(%)	6	209	7	57	1	148	10
	(%)	1.4	47.7	1.6	13.0	0.2	33.8	2.3
2' 筆 記 具 (は が き)	(人)	毛 筆	万 年 筆	サインペン	ボールペン	鉛 筆	二種以上	そ の 他
	(%)	3	184	7	77	—	154	13
	(%)	0.7	42.0	1.6	17.6	—	35.2	3.0
3. 縦書き・横書き (封 書)	(人)	縦 書 き	横 書 き	両 方	無 答			
	(%)	266	74	90	7			
	(%)	60.7	16.9	20.5	1.6			
3' 縦書き・横書き (は が き)	(人)	縦 書 き	横 書 き	両 方	無 答			
	(%)	323	33	69	12			
	(%)	73.7	7.5	15.8	2.7			
4. 「御中」の印刷 について	(人)	よ い	なんとも	やむをえぬ	不 愉 快	わからない	無 答	
	(%)	120	165	78	49	22	4	
	(%)	27.4	37.7	17.8	11.2	5.0	0.9	

5. 「御芳名」などの「御・芳」消すか	必ず消す	決めていない	消さない	わからない	無	答
(人)	226	72	120	18		2
(%)	51.6	16.4	27.4	4.1		0.5
6. 新聞を読む時間	読まない	10分以内	20分以内	30分以内	30分以上	無 答
(人)	11	58	96	137	134	2
(%)	2.5	13.2	21.9	31.3	30.6	0.5
7. 一カ月間に読んだ本	0冊	1冊	2、3冊	4冊以上	無	答
(人)	64	113	166	94		1
(%)	14.6	25.8	37.9	21.5		0.2
8. 辞書、字典を使うか	めったに	たまに	しばしば	よく	無	答
(人)	15	159	151	113		—
(%)	3.4	36.3	34.5	25.8		—

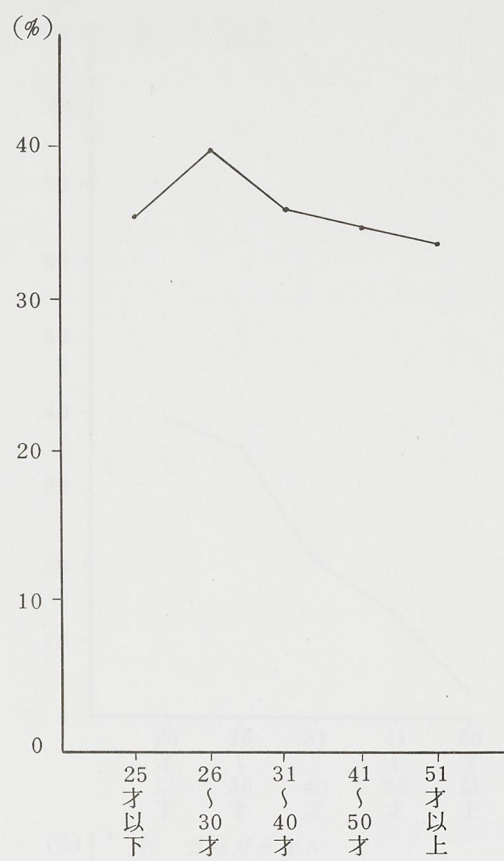
問 題 ㉔

1.	起	首	拝	啓	拝	呈	謹	啓	無	答		
		(人)	3	0	7	3	1	2	1	7		
		(%)	7	0.1		0.7	2	7.6		1.6		
2.	サ	ワ	ヤ	カ	ナ	さわやかな	爽やかな	無	答			
		(人)	3	0	9	1	2	4	5			
		(%)	7	0.5		2	8.3		1.1			
3.	ミ	ナ	サ	マ	みなさま	皆	さ	ま	皆	様	無	答
		(人)	3	8	1	2	7	2	7	2	1	
		(%)	8.7		2	9.0		6	2.1		0.2	
4.	マ	ス	マ	ス	ますます	益	々	無	答			
		(人)	1	6	1	2	7	5	2			
		(%)	3	6.8		6	2.8		0.5			
5.	ゴ	(健	勝)	ご	御		無	答			
		(人)	1	7	6	2	6	0	2			
		(%)	4	0.2		5	9.4		0.5			
6.	コ		ト		こ	と	事	無	答			
		(人)	2	6	4	1	7	2	2			
		(%)	6	0.3		3	9.3		0.5			
7.	サ		テ		さ	て	扱		偕	無	答	
		(人)	4	1	6	1	9		3		-	
		(%)	9	5.0		4.3			0.7		-	

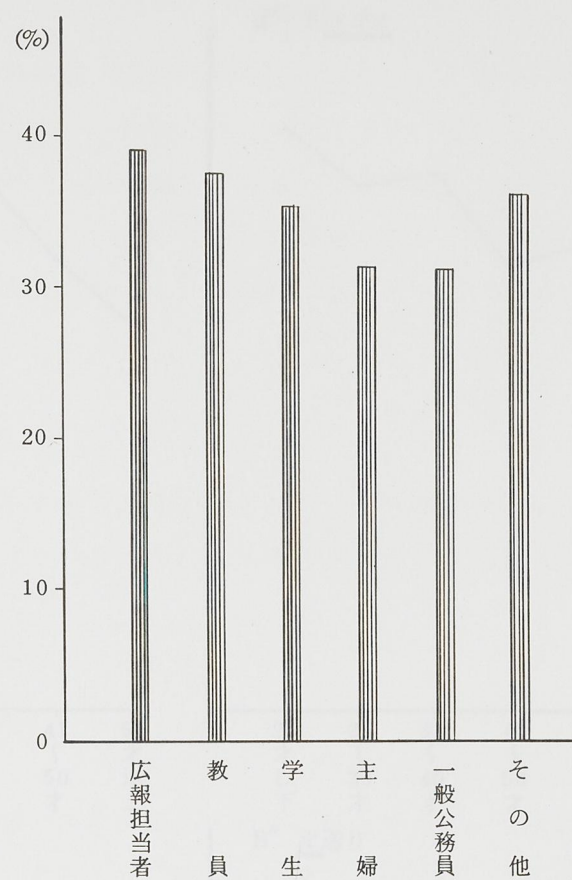
8. ワ タ ク シ	わたくし	私	私	無	答				
(人)	61	269	105		3				
(%)	13.9	61.4	24.0		0.7				
9. コ ノ タ ビ	このたび	この度	此度	無	答				
(人)	96	287	54		1				
(%)	21.9	65.5	12.3		0.2				
10. (転居)イタシ	いたし	致し	無	答					
(人)	112	325	1						
(%)	25.6	74.2	0.2						
11. (これ)まで	まで	迄	無	答					
(人)	302	135	1						
(%)	68.9	30.8	0.2						
12. コ (コウギ)	ご	御	無	答					
(人)	182	244	12						
(%)	41.6	55.7	2.7						
13. コ ウ ギ	こうぎ	厚誼	好誼	交誼	高誼	無	答		
(人)	15	293	25	79	10		16		
(%)	3.4	66.9	5.7	18.0	2.3		3.7		
14. (すると)トモニ	とも	共	無	答					
(人)	238	200	—						
(%)	54.3	45.7	—						
15. (今後)トモ	とも	共	無	答					
(人)	287	148	3						
(%)	65.5	33.8	0.7						
16. ヨ ロ シ ク	よろしく	宜しく	無	答					
(人)	217	219	2						
(%)	49.5	50.0	0.5						
17. ゴ (指導)	ご	御	無	答					
(人)	167	271	—						
(%)	38.1	61.9	—						
18. ゴ (ベントツ)	ご	御	無	答					
(人)	153	282	3						
(%)	34.9	64.4	0.7						

19. ベンタツ	べんたつ	鞭撻	無	答
(人)	38	324	76	
(%)	8.7	74.0	17.4	
20. タマワリ	たまわり	賜り	無	答
(人)	68	370	—	
(%)	15.5	84.5	—	
21. オ(ネガイ)	お	御	無	答
(人)	309	129	—	
(%)	70.5	29.5	—	
22. ネガイ	ねがい	願い	無	答
(人)	7	354	77	
(%)	1.6	80.8	17.6	
23. モウシアゲ	もうしあげ	申し上げ	無	答
(人)	3	435	—	
(%)	0.7	99.3	—	
24. ミギ	みぎ	右	無	答
(人)	16	421	1	
(%)	3.7	96.1	0.2	
25. (略儀)ナガラ	ながら	乍ら	無	答
(人)	302	135	1	
(%)	68.9	30.8	0.2	
26. (書中を)モッテ	もって	以て	無	答
(人)	210	228	—	
(%)	47.9	52.1	—	
27. ゴ(アイサツ)	ご	御	無	答
(人)	183	250	5	
(%)	41.8	57.1	1.1	
28. アイサツ	あいさつ	挨拶	無	答
(人)	36	373	29	
(%)	8.2	85.2	6.6	
29. モウシアゲ	もうしあげ	申し上げ	無	答
(人)	5	433	—	
(%)	1.1	98.9	—	
30. 留書	敬具	頓首	謹言	無答
(人)	369	3	37	29
(%)	84.2	0.7	8.4	6.6

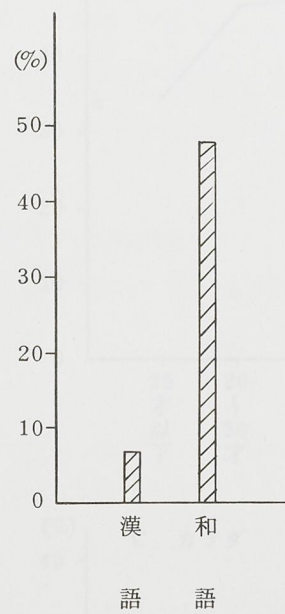
〔図1〕 年齢別かな書き比率



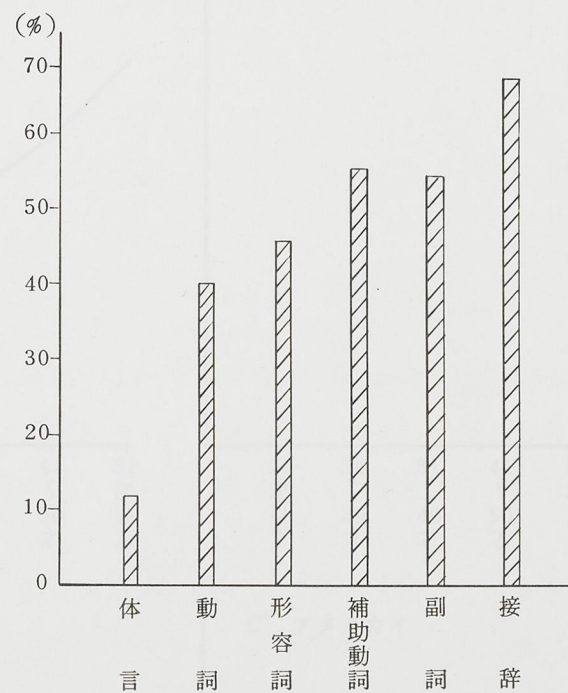
〔図2〕 職種別かな書き比率



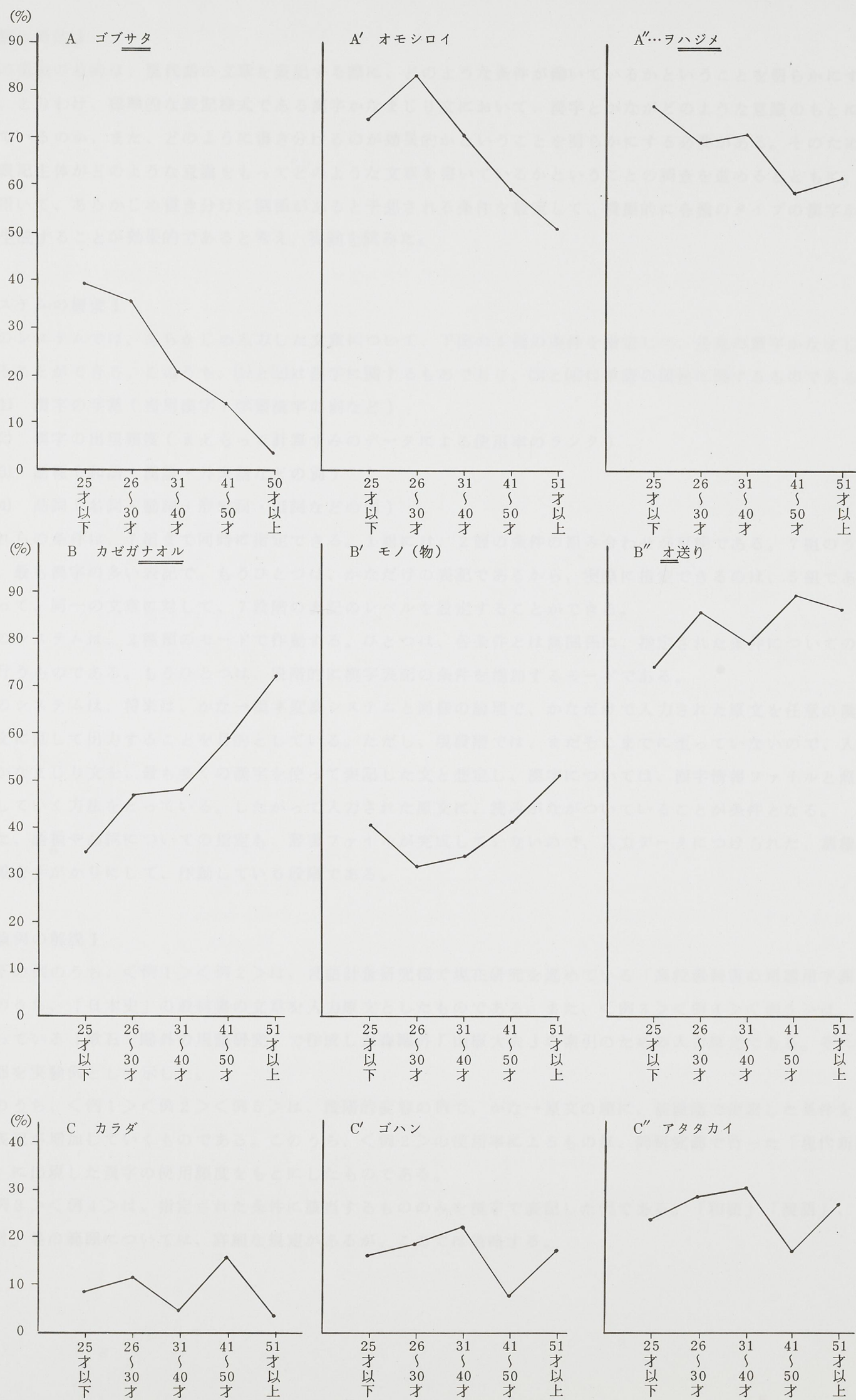
〔図3〕 語種とかな書き比率



〔図4〕 品詞とかな書き比率



〔 図 5 〕 かな書き比率の年齢別変化



3. 表記変容のシミュレーションの実験例

【実験の目的】

この実験の目的は、現代語の文章を表記する際に、どのような条件が働いているかということをはっきりさせることにある。とりわけ、標準的な表記様式である漢字かなまじり文において、漢字とかながどのような意識のもとに書き分けられているのか、また、どのように書き分けるのが効果的かということをはっきりさせる必要がある。そのためには、実際に表記主体がどのような意識をもってどのような文章を書いているかということの調査を進めるとともに、電子計算機を用いて、あらかじめ書き分けに関係があると予想される条件を設定して、模擬的に各種のタイプの漢字かなまじり文を生成することが効果的であると考え、実験を試みた。

【システムの概要】

このシステムでは、あらかじめ入力した文章について、下記の4種の条件を指定して、任意の漢字かなまじり文を出力することができる。このうち、(1)と(2)は漢字に関するものであり、(3)と(4)は単語の属性に関するものである。

- (1) 漢字の字種（当用漢字・学習漢字の別など）
- (2) 漢字の出現頻度（まえもって計算済みのデータによる使用率のランク）
- (3) 語種（和語・漢語・外来語などの別）
- (4) 品詞（名詞・動詞・形容詞・副詞などの別）

これらの条件は、7組まで同時に指定できる。1組には、2箇の条件の組み合わせが可能である。7組のうち、ひとつは、最も漢字の多い表記で、もうひとつは、かなだけの表記であるから、実際に指定できるのは、5組である。それによって、同一の文章に対して、7段階の表記のレベルを設定することができる。

このシステムは、2種類のモードで作動する。ひとつは、各条件とは無関係に、指定された条件についてのみ書き分けを行うものである。もうひとつは、段階的に漢字表記の条件を増加するモードである。

このシステムは、将来は、かな→漢字変換システムと同様の論理で、かなだけで入力された原文を任意の漢字かなまじり文に直して出力することを目的としている。ただし、現段階では、まだそこまで至っていないので、入力された漢字かなまじり文を、最も多くの漢字を使って表記した文と想定し、漢字については、漢字情報ファイルと照合して、変換していく方法をとっている。したがって入力された原文に、読みがながついていることが条件となる。

また、語種や品詞についての指定も、辞書ファイルが完成していないので、入力データにつけられた、語種情報や品詞情報を手がかりにして、作動している段階である。

【実験例の解説】

以下の例のうち、〈例1〉〈例2〉は、言語計量研究部で現在研究を進めている「高校教科書の用語用字調査」のデータのうち、「日本史」の教科書の文章を入力原文としたものである。また、〈例3〉〈例4〉〈例5〉は、同研究部で行っている「漱石・鷗外の用語研究」で作成した森鷗外『山椒大夫』の索引のための入力原文である。それぞれ、その一部を実験例として示した。

このうち、〈例1〉〈例2〉〈例5〉は、段階的変容の例で、かな→原文の順に、前段階で指定した条件を含みつつ、漢字表記が増加していくものである。このうち、〈例2〉の使用率によるものは、同研究部で行った「現代新聞の漢字調査」に出現した漢字の使用頻度をもとにしたものである。

〈例3〉〈例4〉は、指定された条件に該当するもののみを漢字で表記した例である。「和語」「漢語」、「体言」「用言」等の範囲については、詳細な規定があるが、ここでは省略する。

【実験例】

〔例1〕字種による書き分け（段階的変容）

〈かなのみ〉

いっぽう、せいふはじんこうのぞうかによってくぶてんがふそくしたので、722ねん（ようろう6）、100まんちょうぶのかいこんけいかくをたて、さらに723ねん（ようろう7）、さんぜいっしんほうをしこうしてかいこんをしょうれいした。これはあたらしくかんがいしせつをつくったものはさんせいのあいだ、きゅうらいのしせつをしょうしたばあいにはいっしょうのあいだこんてんのしゅうをみとめるものである。せいふはさらに743ねん（てんぴょう15）こんてんえいせいしざいほうをはっぶし、いっていげんどないでかいこんしたとちはえいきゅうにしゅうをみとめることによっててんちのぞうかをはかった。これはかいしんらいのどこくゆうのげんそくをやぶるじゅうようなかいかくであり、きぞくやじいんのだいとちしゅうのうごきをじょうちょうするけつかになった。いごきぞく・じいんなどは、ぼうだいなるうどうりよくをつかってこんてんのかいはつやかいれをおこない、だいきぼなどちけいえいをすすめていった。これがのちにしょうえんとよばれるもののおこりである。

〈学習漢字→漢字〉

一方、政府は人口の増加によって口分田が不足したので、722年（養老6）、100万町歩の開こん計画をたて、さらに723年（養老7）、三世一身法を施行して開こんをしょうれいした。これは新しくかんがいし設をつくったものは三世の間、旧来のし設を使用したばあいには一生の間こん田の私有を認めるものである。政府はさらに743年（天平15）こん田永世私財法を発布し、一定限度内で開こんした土地は永久に私有を認めることによって田地の増加をはかった。これは改新以来の土地国有の原則を破る重要な改革であり、貴族や寺院の大土地所有の動きを助長する結果になった。以後貴族・寺院などは、ぼう大な労働力を使ってこん田の開発や買入れをおこない、大規模な土地経営をすすめていった。これが後にしょう園と呼ばれるもののおこりである。

〈当用漢字→漢字〉

一方、政府は人口の増加によって口分田が不足したので、722年（養老6）、100万町歩の開墾計画をたて、さらに723年（養老7）、三世一身法を施行して開墾を奨励した。これは新しくかんがい施設をつくったものは三世の間、旧来の施設を使用したばあいには一生の間墾田の私有を認めるものである。政府はさらに743年（天平15）墾田永世私財法を発布し、一定限度内で開墾した土地は永久に私有を認めることによって田地の増加をはかった。これは改新以来の土地国有の原則を破る重要な改革であり、貴族や寺院の大土地所有の動きを助長する結果になった。以後貴族・寺院などは、ぼう大な労働力を使って墾田の開発や買入れをおこない、大規模な土地経営をすすめていった。これが後に莊園と呼ばれるもののおこりである。

〈原文〉

一方、政府は人口の増加によって口分田が不足したので、722年（養老6）、100万町歩の開墾計画をたて、さらに723年（養老7）、三世一身法を施行して開墾を奨励した。これは新しく灌漑施設をつくったものは三世の間、旧来の施設を使用したばあいには一生の間墾田の私有を認めるものである。政府はさらに743年（天平15）墾田永世私財法を発布し、一定限度内で開墾した土地は永久に私有を認めることによって田地の増加をはかった。これは改新以来の土地国有の原則を破る重要な改革であり、貴族や寺院の大土地所有の動きを助長する結果になった。以後貴族・寺院などは、ぼう大な労働力を使って墾田の開発や買入れをおこない、大規模な土地経営をすすめていった。これが後に莊園と呼ばれるもののおこりである。

〔例2〕使用率による書き分け（段階的変容）

〈かなのみ〉

しかしかまくらちゅうきいご、ばくふのけんりよくがしだいにつよくなると、じとうのなかにはばくふのけんりよくをはいけいにしょうえんりょうしゅへのねんぐのうにゅうをおこしたり、おうりょうしたりするものがおおくなって、ほんじょやりょうけとのあいだにふんそうやそしょうがたえなかった。しかもほんじょやりょうけのおおきはきょうとやならにいたので、しょうえんにすむじとうのふほうこういをおさえきれず、じとうのあいだにじとううけのけいやくをむすんでしゅうにゅうのかくほをはかるものもあらわれてきた。じとううけは、りょうしゅがじとうにしょうえんのかんりをいちにんし、ねんぐのしゅうのうをうけおわせるものであるが、ばくふもすすんでこのせいどのほごをはかったこともあって、しょうえんのかんりけんはじとうのてにうつっていった。

〈上位200字→漢字〉

しかしかまくら中期以後、ばく府のけん力がしだいに強くなると、地とうのなかにはばく府のけん力をはいけいにしょうえんりょう主への年ぐのう入をおこしたり、おうりょうしたりするものが多くなって、本所やりょう家との間にふんそうやそしょうがたえなかった。しかも本所やりょう家の多くは京都やならにいたので、しょうえんにすむ地とうの不法行いをおさえきれず、地とうとの間に地とううけのけい約を結んでしゅう入のかく保をはかるものもあらわれてきた。地とううけは、りょう主が地とうにしょうえんのかん理を一にんし、年ぐのしゅうのうをうけおわせるものであるが、ばく府もすすんでこの制度の保ごをはかったこともあって、しょうえんのかん理けんは地とうの手にうつっていった。

〈上位500字→漢字〉

しかしかまくら中期以後、ばく府の権力がしだいに強くなると、地頭のなかにはばく府の権力をはいけいにしょう園領主への年ぐのう入をおこしたり、おう領したりするものが多くなって、本所や領家との間にふん争やそしょうがたえなかった。しかも本所や領家の多くは京都やならにいたので、しょう園に住む地頭の不法行いをおさえきれず、地頭との間に地頭うけのけい約を結んで収入の確保をはかるものもあらわれてきた。地頭うけは、領主が地頭にしょう園のかん理を一任し、年ぐの収のうをうけ負わせるものであるが、ばく府もすすんでこの制度の保ごをはかったこともあって、しょう園のかん理権は地頭の手にうつっていった。

〈上位1000字→漢字〉

しかし鎌倉中期以後、幕府の権力がしだいに強くなると、地頭のなかには幕府の権力を背景にしょう園領主への年ぐの納入をおこしたり、押領したりするものが多くなって、本所や領家との間にふん争や訴訟が絶えなかった。しかも本所や領家の多くは京都や奈良にいたので、しょう園に住む地頭の不法行いをおさえきれず、地頭との間に地頭請のけい約を結んで収入の確保をはかるものもあらわれてきた。地頭請は、領主が地頭にしょう園の管理を一任し、年ぐの収納を請け負わせるものであるが、幕府もすすんでこの制度の保護をはかったこともあって、しょう園の管理権は地頭の手に移っていった。

〈原文〉

しかし鎌倉中期以後、幕府の権力がしだいに強くなると、地頭のなかには幕府の権力を背景に荘園領主への年貢の納入をおこしたり、押領したりするものが多くなって、本所や領家との間に紛争や訴訟が絶えなかった。しかも本所や領家の多くは京都や奈良にいたので、荘園に住む地頭の不法行為をおさえきれず、地頭との間に地頭請の契約を結んで収入の確保をはかるものもあらわれてきた。地頭請は、領主が地頭に荘園の管理を一任し、年貢の収納を請け負わせるものであるが、幕府もすすんでこの制度の保護をはかったこともあって、荘園の管理権は地頭の手に移っていった。

〔例 3〕語種による書き分け

〈かなのみ〉

ひとかいがたちまわるなら、そのひとかいのせんぎをしたらよささうなものである。たびびとにあしをとめさせまいとして、いきくれたものをろうとうにまよはせるやうなおきてを、くにかみはなぜさだめたものか。ふつつかなせわのやきようである。しかしむかしのひとのめにはおきてである。こどものはははたださういふおきてのあるとちにきあわせたうんめいをなげくだけで、おきてのぜんあくはおもはない。

はしのたもとに、かわらへせんたくにおりるもののかよふみちがある。そこからひとむれはかわらにおりた。なるほどたいそうなざいもくがいしがきにたてかけてある。ひとむれはいしがきにそうてざいもくのしたへもぐつてはいつた。おとこのこはおもしろがつて、さきにたつていさんてはいつた。

おくふかくもぐつてはいると、ほらあなのやうになつたところがある。したにはおおきいざいもくがよこになつてゐるので、とこをはつたやうである。

〈漢語のみ→漢字〉

ひとかいがたちまわるなら、そのひとかいの詮議をしたらよささうなものである。たびびとにあしをとめさせまいとして、いきくれたものを路頭にまよはせるやうなおきてを、くにかみはなぜさだめたものか。ふつつかな世話のやきようである。しかしむかしのひとのめにはおきてである。こどものはははたださういふおきてのある土地にきあわせた運命をなげくだけで、おきての善悪はおもはない。

はしのたもとに、かわらへ洗濯におりるもののかよふみちがある。そこからひとむれはかわらにおりた。なるほど大層な材木がいしがきにたてかけてある。ひとむれはいしがきにそうて材木のしたへもぐつてはいつた。おとこのこはおもしろがつて、さきにたつていさんてはいつた。

〈和語のみ→漢字〉

人買が立ち廻るなら、其人買のせんぎをしたら好ささうなものである。旅人に足を留めさせまいとして、行き暮れたものをろうとうに迷はせるやうな掟を、国守はなぜ定めたものか。不束なせわのやきようである。併し昔の人の目には掟である。子供等の母は只さう云ふ掟のあるとちに来合せたうんめいを歎くだけで、掟のぜんあくは思はない。

橋の袂に、河原へせんたくに降りるものの通ふ道がある。そこから一群は河原に降りた。なるほどたいそうなざいもくが石垣に立て掛けてある。一群は石垣に沿うてざいもくの下へ潜つて這入つた。男の子は面白がつて、先に立つて勇んで這入つた。

〈原文〉

人買が立ち廻るなら、其人買の詮議をしたら好ささうなものである。旅人に足を留めさせまいとして、行き暮れたものを路頭に迷はせるやうな掟を、国守はなぜ定めたものか。不束な世話の焼きやうである。併し昔の人の目には掟である。子供等の母は只さう云ふ掟のある土地に来合せた運命を歎くだけで、掟の善悪は思はない。

橋の袂に、河原へ洗濯に降りるものの通ふ道がある。そこから一群は河原に降りた。なる程大層な材木が石垣に立て掛けてある。一群は石垣に沿うて材木の下へ潜つて這入つた。男の子は面白がつて、先に立つて勇んで這入つた。

〔例４〕品詞による書き分け

〈かなのみ〉

ひとむれはしばらくだまつてあるいた。

むこうからからおけをかついてくるおんながある。しおはまからかえるしおくみおんなである。

それにじょちゅうがこえをかけた。「もしもし。このへんにたびのやどをするいえはありませんか。」

しおくみおんなはあしをとめて、しゅうじゅうよにんのむれをみわたした。そしてかういつた。「まあ、おきのどくな。あいにくなところでひがくれますね。このとちにはたびのひとをとめてあげるところはいっけんもありません。」

じょちゅうがいつた。「それはほんとうですか。どうしてそんなにじんきがわるいのでせう。」

ふたりのこどもは、はずんでくるたいわのちょうしをきにして、しおくみおんなのそばへよつたので、じょちゅうとさんになておんなをとりまいたかたちになつた。

〈用語のみ→漢字〉

ひとむれはしばらく黙つて歩いた。

むこうからからおけを担いて来るおんながある。しおはまから帰るしおくみおんなである。

それにじょちゅうがこえを掛けた。「もしもし。このへんにたびのやどをするいえはありませんか。」

しおくみおんなはあしを駐めて、しゅうじゅうよにんのむれを見渡した。そしてかう云つた。「まあ、おきのどくな。あいにくなところでひが暮れますね。このとちにはたびのひとを留めて上げるところはいっけんもありません。」

じょちゅうが云つた。「それはほんとうですか。どうしてそんなにじんきが悪いのでせう。」

ふたりのこどもは、はずんで来るたいわのちょうしをきにして、しおくみおんなのそばへ寄つたので、じょちゅうとさんになておんなを取り巻いたかたちになつた。

〈体言のみ→漢字〉

一群はしばらくだまつてあるいた。

向うから空桶をかついてくる女がある。塩浜からかえる潮汲女である。

それに女中が声をかけた。「もしもし。この辺に旅の宿をする家はありませんか。」

潮汲女は足をとめて、主従四人の群をみわたした。そしてかういつた。「まあ、お気の毒な。あいにくな所で日がくれますね。この土地には旅の人をとめてあげる所は一軒也没有ありません。」

女中がいつた。「それは本当ですか。どうしてそんなに人気が悪くわいのでせう。」

二人の子供は、はずんでくる対話の調子を気にして、潮汲女の傍へよつたので、女中と三人で女をとりまいた形になつた。

〈原文〉

一群は暫く黙つて歩いた。

向うから空桶を担いて来る女がある。塩浜から帰る潮汲女である。

それに女中が声を掛けた。「申し申し。此辺に旅の宿をする家はありませんか。」

潮汲女は足を駐めて、主従四人の群を見渡した。そしてかう云つた。「まあ、お気の毒な。生憎な所で日が暮れますね。此土地には旅の人を留めて上げる所は一軒也没有ありません。」

女中が云つた。「それは本当ですか。どうしてそんなに人気が悪いのでせう。」

二人の子供は、はずんで来る対話の調子を気にして、潮汲女の傍へ寄つたので、女中と三人で女を取り巻いた形になつた。

〔例 5〕品詞による書き分け（段階的変容）

〈かなのみ〉

えちごのかすがをへていまづへでるみちを、めずらしいたびびとのひとむれがあるいてゐる。はははさんじゅっさいをこえたばかりのおんなで、ふたりのこどもをつれてゐる。あねはじゅうし、おとうとはじゅうにてある。それによんじゅうぐらいのじょちゅうがひとりついて、くたびれたはらからふたりを、「もうぢきにおやどにおつきなさいます」といつてはげましてあるかせようとする。ふたりのなかで、あねむすめはあしをひきずるやうにしてあるいてゐるが、それでもきがかつてゐて、つかれたのをははやおとうとにしらせまいとして、おりおりおもひだしたやうにだんりよくのあるあるきつきをしてみせる。ちかいみちをものまいりにてもあるくのなら、ふさはしくもみえさうなひとむれてあるが、かさやらつえやらかいがいしいでたちをしてゐるのが、だれのめにもめずらしく、またきのどくにかんぜられるのである。

〈純名詞のみ→漢字〉

えちごのかすがをへていまづへでる道を、めずらしい旅人の一群があるいてゐる。母はさんじゅっさいをこえたばかりの女で、ふたりの子供をつれてゐる。姉はじゅうし、弟はじゅうにてある。それによんじゅうぐらいの女中がひとりついて、くたびれた同胞ふたりを、「もうぢきにお宿にお著なさいます」といつてはげましてあるかせようとする。ふたりの中で、姉嬢は足をひきずるやうにしてあるいてゐるが、それでも気がかつてゐて、つかれたのを母や弟にしらせまいとして、おりおりおもひだしたやうに弾力のある歩附をしてみせる。ちかい道を物詣にてもあるくのなら、ふさはしくもみえさうな一群であるが、笠やら杖やらかいがいしい出立をしてゐるのが、だれの目にもめずらしく、また気の毒にかんぜられるのである。

〈純名詞＋固有名詞＋数詞→漢字〉

越後の春日をへて今津へでる道を、めずらしい旅人の一群があるいてゐる。母は三十さいをこえたばかりの女で、二人の子供をつれてゐる。姉は十四、弟は十二である。それに四十ぐらいの女中が一人ついて、くたびれた同胞二人を、「もうぢきにお宿にお著なさいます」といつてはげましてあるかせようとする。二人の中で、姉嬢は足をひきずるやうにしてあるいてゐるが、それでも気がかつてゐて、つかれたのを母や弟にしらせまいとして、おりおりおもひだしたやうに弾力のある歩附をしてみせる。ちかい道を物詣にてもあるくのなら、ふさはしくもみえさうな一群であるが、笠やら杖やら甲斐々々しい出立をしてゐるのが、だれの目にもめずらしく、また気の毒にかんぜられるのである。

〈純名詞＋固有名詞＋数詞＋用言→漢字〉

越後の春日を経て今津へ出る道を、珍らしい旅人の一群が歩いてゐる。母は三十さいを踰えたばかりの女で、二人の子供を連れてゐる。姉は十四、弟は十二である。それに四十ぐらいの女中が一人附いて、草臥れた同胞二人を、「もうぢきにお宿にお著なさいます」と云つて励まして歩かせようとする。二人の中で、姉嬢は足を引き摩るやうにして歩いてゐるが、それでも気が勝つてゐて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、おりおり思ひ出したやうに弾力のある歩附をして見せる。近い道を物詣にても歩くのなら、ふさはしくも見えさうな一群であるが、笠やら杖やら甲斐々々しい出立をしてゐるのが、だれの目にも珍らしく、また気の毒に感ぜられるのである。

〈純名詞＋固有名詞＋数詞＋用言＋副詞＋接続詞＋連体詞＋代名詞→漢字〉

越後の春日を経て今津へ出る道を、珍しい旅人の一群が歩いてゐる。母は三十さいを踰えたばかりの女で、二人の子供を連れてゐる。姉は十四、弟は十二である。それに四十ぐらいの女中が一人附いて、草臥れた同胞二人を、「もうぢきにお宿にお著なさいます」と云つて励まして歩かせようとする。二人の中で、姉嬢は足を引き摩るやうにして歩いてゐるが、それでも気が勝つてゐて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折々思ひ出したやうに弾力のある歩附をして見せる。近い道を物詣にでも歩くのなら、ふさはしくも見えさうな一群であるが、笠やら杖やら甲斐々々しい出立をしてゐるのが、誰の目にも珍らしく、又氣の毒に感ぜられるのである。

〈原文〉

越後の春日を経て今津へ出る道を、珍しい旅人の一群が歩いてゐる。母は三十歳を踰えたばかりの女で、二人の子供を連れてゐる。姉は十四、弟は十二である。それに四十位の女中が一人附いて、草臥れた同胞二人を、「もうぢきにお宿にお著なさいます」と云つて励まして歩かせようとする。二人の中で、姉嬢は足を引き摩るやうにして歩いてゐるが、それでも気が勝つてゐて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折々思ひ出したやうに弾力のある歩附をして見せる。近い道を物詣にでも歩くのなら、ふさはしくも見えさうな一群であるが、笠やら杖やら甲斐々々しい出立をしてゐるのが、誰の目にも珍らしく、又氣の毒に感ぜられるのである。

おねがい

国立国語研究所

この調査は、手紙の書き方を中心として、ものを書くことについて、みなさんが日常どのような考えをもっているかをしるかを、知るためのものです。決して読み書きの力をためす調査ではありません。どうか、しばらくのあいだご協力ください。

生まれ年	明治 大正 昭和	<div></div> 年生まれ
性別	男・女	
職業		
その職業についての年数	年	
最終学歴	・小学校 ・中学校（旧制高小をふくむ） ・高等学校（旧制中学・高女をふくむ） ・大学	

A 次の各項のあてはまるものを○で囲んでください。

1. この一か月に個人的な用事で手紙やはがきを何通ぐらい出しましたか。（年賀状やあいさつ状は除きます。）

- a. 書かなかった
b. 1～3通
c. 4・5通
d. 6通以上

2. 手紙を書くときは、おもに、どのような筆記用具を使いますか。（二つ以上○をつけてもかまいません。）

- 2 1 1 封書 a. 毛筆 b. 万年筆 c. サインペン
d. ボールペン e. 鉛筆 f. その他

- 2 1 2 はがき a. 毛筆 b. 万年筆 c. サインペン
d. ボールペン e. 鉛筆 f. その他

3. びんせんやはがきは縦書きにしますか、横書きにしますか。

- 3 1 1 びんせん a. 縦書き b. 横書き c. 両方
3 1 2 はがき a. 縦書き b. 横書き c. 両方

4. 往復はがきなどの返信のあてに、「○○御中」と印刷してあるのをどう思いますか。

- a. 手間が省けてよい b. なんとも思わない c. やむをえない
d. 不愉快だ e. わからない

5. 往復はがきなどの返信に「御芳名」「御住所」などと印刷してあるとき、あなたは「御」や「芳」の字を消しますか。

- a. 必ず消す b. 決めていない
c. 消さない d. わからない

6. 新聞は毎日平均して何分ぐらい読みますか。

- a. 読まない b. 10分以内 c. 20分以内
d. 30分以内 e. 30分以上

7. この一か月雑誌以外に本を何冊読みましたか。

- a. 読まなかった b. 1冊 c. 2・3冊 d. 4冊以上

8. 国語辞書、字典はどの程度使いますか。

- a. めったに使わない b. たまに使うことがある
c. しばしば使うことがある d. よく使う

○

あなた、または、あなたのご主人が転勤を命ぜられたとします。そこで、転居通知をかねたあいさつ状を出すことにしました。文章を考えるのがめんどろなので、印刷所に相談に行ったところ、左記のようなサンプルを見せて、印刷所に相談にを、依頼客のほうで指定してほしいとのことでした。

もし、あなたならば、どれを選びますか。例にならって、該当するものを○で囲んでください。

(例)

御
お

変わり
かわり

ありませんか

拝啓
拝呈
謹啓

爽やかな
さわやかな

季節となりました

みなさま
皆さま

には、

益々
ますます

御
ご

健勝の

事
こと

と存じます

さて
扱
諸

私は
私は
わたくしは

この度
此度
このたび

〇〇〇〇〇に

転勤を命ぜられ、左記に転居

致し
いたし

ました

迄
迄
これ

まで

の
御
ご

厚誼
好誼
交誼
高誼
こ誼

に感謝すると

共
とも

に、

今後

共
とも

宜しく
よろしく

御
ご

指導

御
ご

鞭撻
べんたつ

を

賜り
たまわり

ますよう

お
御

願
ねがい

申し上げ
もうしあげ

ます

右
みぎ

略儀

乍ら
ながら

書中を

以て
もって

御
ご

挨拶
あいさつ

申し上げ
もうしあげ

ます

敬具
頓首
謹言

E

次の文章は、小学校のPTAの会報に投稿しようとする文章の一部です。文字の使い方、書き方で誤りや書きかえたほうがよさそうなところがあります。あなたが投稿者から相談を受けたとしたらどのように手を入れますか。

例にならって訂正し、その理由をあとの理由欄から選んで記号を記入してください（理由は、原則として一つを選ぶものとします。ただし、該当するものが二つ以上ある場合は、それでもかまいません。）

E

天気

①

(例) 今日はぐずついたせいで、気分になりそうな様配です

先日、ある学習塾を訪門しました。応待に表れた人の

話によると、五歳の幼稚園児で、土曜日の午后はもちろ

ん、日曜日迄も塾に通って来る子がいるそうです。私が

それ位の年令だった頃に比べると、雲でいの差があるよ

うに感じられます。一、親が勉強しろなどと云うこと

は、先ずありませんでした。たまに言われても、私など

は親の眼を盗み、窓から跳び下りたり、へいを乗り越え

たりして、あそびに行ったものでした。

△理由欄▽

(誤りだから訂正する場合)

- ① 別の漢字をまちがって使っているから
- ② 漢字の字体（字形）がまちがっているから
- ③ 漢字で書いてはいけないことだから
- ④ 仮名で書いてはいけないことだから
- ⑤ 送り仮名（または仮名づかい）の規則に反しているから
- ⑥ もとの漢字が当用漢字でないから
- ⑦ その他

(誤りとはいえないが訂正したほうがよいと思う場合)

- A この漢字のほうがそのことばにふさわしいから
- B この字体（字形）のほうがより適当だから
- C こう書くほうが読みやすいから
- D こう書くほうが普通だから
- E 自分はこう書くことにしているから
- F 当用漢字で書けるから
- G もとの漢字が当用漢字でないから
- H その他

ご協力ありがとうございました。